

法制史研究 70号(2020年)目次

【論説】

キム・ハンバク	清代中期における徒刑の変質と「里程」の導入	1
前田 星	魔女裁判と学識法曹 — ヴェストファーレン公領における魔女裁判実務	41

【学界動向】

裁判史・政治史・経済史の対話 — 近世日本の法的世界を問い直す		
高槻泰郎	趣意文	79
杉本 史子	近世裁判史研究の可能性	81
大平 祐一	複合国家の裁判と法	99
松園 潤一郎	中近世の裁判と合意形成	107
高槻 泰郎	近世期市場経済における商秩序	115

【シンポジウム報告】

① 日本における法史研究の歴史		
田口 正樹	ミニ・シンポジウム「日本における法史研究の歴史」趣旨説明	127
神野 潔	明治期における日本法制史学の展開図	131
赤城 美恵子	東洋法制史学の生成	148
藤野 奈津子	明治前期における西洋法史学の誕生	179
松沢 裕作	「史学」成立の文脈からみた日本の法史研究の始まり	208
大中 有信	実定法学の観点からのコメント	213
② 日本法史／法制史テキストの可能性 — 初学者への問いかけと隣接領域への広がり		
高谷 知佳 出口 雄一	はじめに	221
新田 一郎	「日本法制史の教科書」に何を求めるか	225
大屋 雄裕	法の黄昏と法制史の意義	239
内田 貴	法学教育における日本法制史への期待 — 『日本法史から何がみえるか』『概説日本法制史』へのコメント	252

【書評】

西村 安博	黒瀬にな 優先的判断事項の争奪と出訴方法 — 鎌倉末期公家訴訟にみる「沙汰の肝要」設定の実態 高谷知佳 中世京都の赦免	273
岩谷 十郎	山口亮介 天保・弘化期のオランダ法典翻訳におけるburger関連語の訳出 — 『和蘭律書』「断罪篇」を中心に 高田久実 贖罪・收贖から罰金刑へ — 明治初期の刑事罰と法典化 大泉陽輔 近代日本における特許権者の素描	277
丸本 由美子	高塩博 江戸幕府の「敲」と人足寄場 — 社会復帰をめざす刑事政策	280
杉本 史子	幕藩研究会編 論集 近世国家と幕府・藩	286
大平 祐一	藩法研究会編 幕藩法の諸相 — 規範・訴訟・家	293
兒玉 圭司	赤司友徳 監獄の近代 — 行政機構の確立と明治社会	299
三阪 佳弘	Darryl.E.Flaherty著、浅古弘監訳 近代法の形成と実践 — 一九世紀日本における在野法曹の世界	304
荒邦 啓介	藤田大誠 国家神道と国体論 — 宗教とナショナルイズムの学際的研究	311
榎本 淳一	上野利三 飛鳥浄御原律の存否について	316
服部 一隆	本庄聡子 慶雲三年輪祖折衷法と熟田	318
十川 陽一	古田一史 雑工戸の変質と造兵司の解体	320

亀田 俊和	花田卓司 観応の擾乱の恩賞宛行	322
畠山 亮	松園潤一郎 中世における年紀法の機能と変容 長又高夫 『御成敗式目』第八条の法解釈をめぐって	324
西田 友広	渡邊正男 丹波篠山市教育委員会所蔵「貞永式目追加」 木下竜馬 新出鎌倉幕府法令集についての一考察 — 「青山文庫本貞永式目追加」	328
高塩 博	片保涼介 近世日本の贖刑論の一考察(一)～(三・完)	330
安高 啓明	吉田正志 盛岡藩の罪と罰雑考(一)～(四・完)	332
山中 至	安高啓明 刑法草書の運用と罪状認定過程 — 盗賊倉庫堅完を事例に	334
村上 一博	林真貴子 近代日本における無資格者による法定代理とその終焉	337
橋本 誠一	田中亜紀子 明治期における刑事弁護 — 治罪法導入前後の状況	338
高橋 裕	出口雄一 法の社会史的考察と「戦後法学」 — 一九六〇年代の基礎法学方法論をめぐる覚書	340
出口 雄一	小石川裕介 戦前・戦時下の人文社会科学と法学者	344
高見澤 磨	額定其勞 奴隸なのか、従属民なのか — 清代モンゴルにおける主従関係と人身売買 木下慎吾 清代中国における府の初審機能 — 越訴の受理と審理に着目して 林政佑 日本統治時代台湾における未成年者犯罪の処遇 — 裁判実務に着目して	347
久保 茉莉子	山本英史編 中国近世法制史料読解ハンドブック	351
中村 正人	谷井俊仁・谷井陽子訳解 大清律 刑律 — 伝統中国の法的思考 — 二	355
西 英昭	金子肇 近代中国の国会と憲政 — 議会専制の系譜	360
田中 俊光	矢木毅 朝鮮朝刑罰制度の研究	365
嶺崎 寛子	小野仁美 イスラーム法の子ども観 — ジェンダーの視点でみる子育てと家族	370
吉村 武典	熊倉和歌子 中世エジプトの土地制度とナイル灌漑	375
小林 文治	宮宅潔 秦代徭役・兵役制度の再検討	382
小林 聡	大知聖子 爵保有者の階層にみる両晋・北魏の爵制運用の比較	384
岡野 誠	小島浩之 『唐六典』の編纂に関する一試論 — 『初学記』と『唐六典』の注	386
陶安 あんど	川村康 挙重明軽・挙軽明重と比附	388
平田 茂樹	鎬木丞 北宋元豊大理寺攷 — 司法制度再編の一側面	390
植松 正	七野敏光 元代検屍制度をめぐる一裁判案件について	392
山本 英史	五味知子 清代の告示からみた地方官と士民 — 『点石齋画報』を手掛かりに	395
井上 和枝	山内民博 一八五二年朝鮮『平安道中和府壬子式年戸籍』初探	397
額定 其勞	萩原守 清代モンゴルにおける犯罪者の捕獲期限	399

田中 実	菅尾暁 表見相続人の和解行為に関する追認問題 — Scaev.D.2,15,3,2	401
	塚原義典 ユリアヌスの法解釈 — アクィリウス法を素材に	
	佐々木健 古代ローマの提示訴権と評価額減殺 — 学説彙纂第一〇巻第四章第九法文第八項(ウルピアーヌス『告示註解』第二四巻)に見る「価額を下回る」	
藤本 幸二	上口裕 カロリーナ刑事法典の研究	405
吉原 達也	栗辻悠 模擬弁論に登場する弁護 — 伝クインティリアヌス『小模擬弁論集』を題材に	411
宮坂 渉	清水悠 果実概念の形成 — 女奴隷の子(partus ancillae)は果実に含まれるのか? — 果実の帰属と使用取得の可否を中心に	413
五十君 麻里子	田中実 不倫遺言の訴の法学による規範化 — キュジャースの註解を手掛かりに	415
林 智良	吉原達也 宮崎道三郎博士講述『比較法制史』第二部 独逸法制史	417
	同 宮崎道三郎博士の羅馬法講義について	
佐々木 健	出雲孝 近世ドイツの市民法学における数学的方法の試み — ライプニッツ=ヴォルフ学派の方法論とそれに対する法学者ネットェルブラットの応答を手がかりに	420
	同 近世自然法論における継続的契約概念の萌芽 — クリスティアン・ヴォルフの契約理論を中心に	
蝶野 立彦	鍵和田賢 近世神聖ローマ帝国における「不寛容」のあり方 — 八世紀初頭の都市ケルンにおける「居留民条令問題」を事例として	425
荒井 真	河村浩城 ドイツ帝政期の法律相談援助	429
田口 正樹	櫻井利夫 (補論)中世盛期バイエルンの貴族ファルケンシュタイン伯の城塞支配権 — 領域支配権の視角から	432
藪本 将典	佐藤猛 中世後期アンジュー公国におけるルネ・ダンジューの奉仕者集団 ～ボーヴォー家～ (一)	434
辻 泰一郎	鈴木山海 近世ドイツ裁判制度研究の現状と展望 — 帝国宮内法院を中心に	436
大西 楠・テア	西川洋一 ウルブリヒト期ドイツ民主共和国における行政の裁判的統制をめぐる一議論	438
上田 理恵子	野田龍一 シュテーター美術館事件における占有訴訟の一考察 — 『勅法彙纂』C.6.33.3と『改訂改訂都市法典』6.2.1	445
	同 シュテーター美術館事件における係争物処分禁止 — 一八二一年四月二日イエーナ大学鑑定意見をめぐって	
	同 シュテーター美術館事件における証拠保全 — 「ことがらの永久の記憶のための証明」	
	同 シュテーター美術館事件における訴訟手続の受継 — シュテーター美術館所蔵史料をてがかりに	
大久保 優也	原田俊彦 ただ一つの出来事 — トマス・ジェファソンの歴史認識	449
若曾根 健治	藤本幸二 刑事手続における記録へのアクセス権の本質 — 刑事弁護の史的分析試論	451
小林 繁子	牟田和男 都市の教養エリートと魔女迫害 — 宗教改革・三十年戦争を背景にしたアルザス帝国都市ハーゲナウの場合	453

松本 尚子	藤川直樹 一九世紀ドイツ公法学における「君侯法」— 王位継承法理論の展開を中心として(一)~(五・完)	455
-------	---	-----

【会報】

	学会記事	463
	報告要旨	466
	訃報	472

【追悼の辞】

長谷山 彰	藤田弘道先生を偲んで	473
水林 彪	利谷先生を偲ぶ	476

【平成31年・令和元年法制史文献目録】

	日本法制史文献目録	1
	東洋法制史文献目録	28
	ローマ法・西洋法制史文献目録	51